

スポーツの実況中継における 計量的文体論的研究

宮 本 ル ミ 子

1. 目的

大野晋（1956）は、日本語の古典文学作品9作において、「一体何語くらいの語彙によって書かれているか。各語の頻度数はどのような分布を示しているか。各作品の語彙量は一体何語くらいであるか。その語彙数の品詞別比率はいかなる状態にあるか。また、各作品に共通な語彙は一体何語くらいあるか」という問いに対し、その語彙数の品詞別比率に注目した立場から、説明を試みた。

大野は、まず万葉集、源氏物語、枕草子、徒然草の語彙を計数し、各作品の語彙においていかなる語が共通するかを明らかにした。それに土佐日記、竹取物語、紫式部日記、讃岐典侍日記、方丈記を加え、各作品の品詞別の語彙数を数え、各品詞の比率を見た。これによると、作品のジャンルにより名詞・動詞・形容詞の比率に特徴のある偏りが見られるという。名詞の比率は、第一に万葉集、第二に徒然草、方丈記、枕草子の随筆グループ、第三に土佐日記、紫式部日記、讃岐典侍日記の日記グループ、第四に竹取物語、源氏物語の物語グループの順に減少し、動詞と形容詞の比率はこれとは反対に、この順に増大する。そして、形容動詞は平安朝の女流文学作品に多く、その他の語の比率は作品には関係せずほぼ一定であることが述べられている。これを、現在では「大野の法則」という。

大野は、「現代の作品にもかかる現象は見出せるのではないか」と推測した。そこで、現代の特徴的な日本語の一つと言える、スポーツの実況中継を取り上げることとする。本論では、実況中継の語彙に着目し、「大野の法則」について実況ではどのような比率が見られるかを明らかにすることを目的とする。また、分析する競技7種目のうち、相撲と競馬の2種目に関しては双方のラジオ中継も取り上げ、テレビとラジオの実況の比較も試みる。

2. 資料について

資料①（表参照。以下同様）には、2002年12月22日の24時45分からTBSにて録画が放送された、フィギュアスケートの第71回全日本フィギュアスケート選手権大会をビデオ録画したものをを用いた。この中の、女子シングル村主章枝選手の演技約6分間を取り上げる。球技の資料②のバレーボールはVリーグをビデオ録画したもので、2003年1月11日にNHK衛星第1放送にて生中継されていた、サントリー対松下電器戦の第5セット約16分間について。資料④の野球はプロ野球の横浜ベイスターズ対阪神タイガース8回戦をビデオ録画したもので、2003年5月10日の16時からTBSで放送されていた、6回表の約8分間についてである。競泳の資料③には、2003年4月27日の15時からNHK総合テレビで放送されていた、日本水泳選手権をビデオ録画したものをを用いた。この中の、男子200mバタフライ決勝の約5分間を取り上げる。格闘技の資料⑤としては、2003年6月23日にテレビ東京で放送された、プロボクシングのWBCスーパーフライ級タイトルマッチ第9ラウンドの約3分間をビデオ録画したものをを使用した。

そして、相撲の資料には、2003年11月19日にNHKで生放送された大相撲九州場所11日目をビデオ録画したもの（資料⑥）と、同時刻NHKラジオ第一放送による中継を録音したもの（資料⑦）を用いる。この中の、栃東と土佐ノ海が取組約7分間について、実況を文字化した。競馬の資料には、2003年11月30日にフジテレビで放送されたスーパー競馬ジャパンカップ（資料⑧）と、同時刻のニッポン放送による日曜競馬ニッポン（資料⑨）を用いた。レースのファンファーレから、レースの結果発表されるまでの約9分間について、同じくアナウンサーの実況のみを文字化したものである。

3. 分析方法

大野が古典文学作品を分析した際の方法に基づき、実況中継を文字化した資料を名詞・動詞・形容詞・形容動詞・その他の5つに分類、集計し、表とグラフにまとめる。その他とは、副詞・連体詞・感動詞・接続詞・擬音語・擬態語を含めたもので、助詞・助動詞はこの数からすべて除外した。名詞には固有名詞または各競技における専門用語的な語や複合名詞、代名詞も含め、動詞には複合動詞も含める。形容動詞に関しては、橋本文法を用いることとする。また、これらの語彙の分類は、延べ語数計算で行う。

4. 分析

表1 品詞別語彙数とその構成比率

資料	①フィギュア	②バレー	③競泳	④野球	⑤ボクシング	⑥相撲	⑦相撲ラジオ	⑧競馬	⑨競馬ラジオ
名詞	66 49.6%	554 63.8%	207 62.7%	337 60.4%	98 45.2%	178 57.0%	259 53.3%	330 53.6%	371 57.2%
動詞	36 27.1%	174 20.0%	64 19.4%	115 20.6%	51 23.5%	73 23.4%	98 20.2%	131 21.2%	139 21.4%
形容詞	2 1.5%	12 1.4%	4 1.2%	7 1.3%	5 2.3%	4 1.3%	9 1.8%	4 0.6%	3 0.5%
形容動詞	2 1.5%	2 0.2%	3 0.9%	5 0.9%	3 1.4%	8 2.6%	5 1.0%	4 0.6%	5 0.8%
その他	27 20.3%	127 14.6%	52 15.8%	94 16.8%	60 27.6%	49 15.7%	115 23.7%	148 24.0%	130 20.1%
計	133 100.0%	869 100.0%	330 100.0%	558 100.0%	217 100.0%	312 100.0%	486 100.0%	617 100.0%	648 100.0%
1分当りの語彙量	22	54	66	70	72	44	69	73	76
中継時間(分)	6	16	5	8	3	7	7	9	9

グラフ 比率の比較

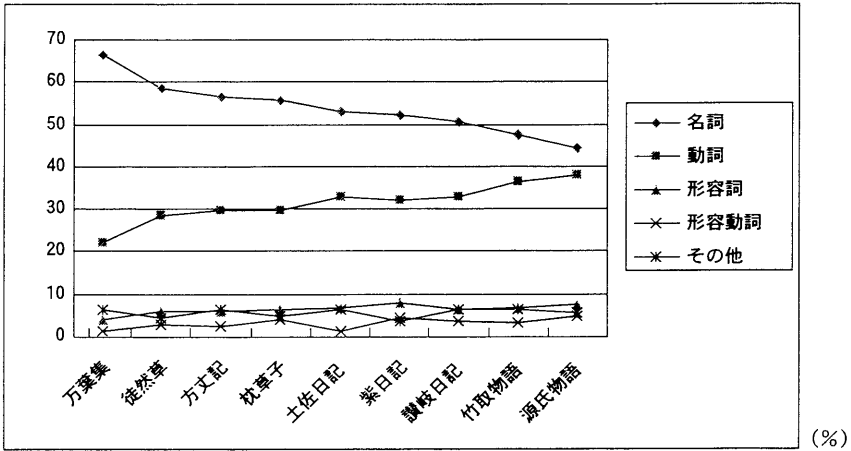


図1 古典文学作品

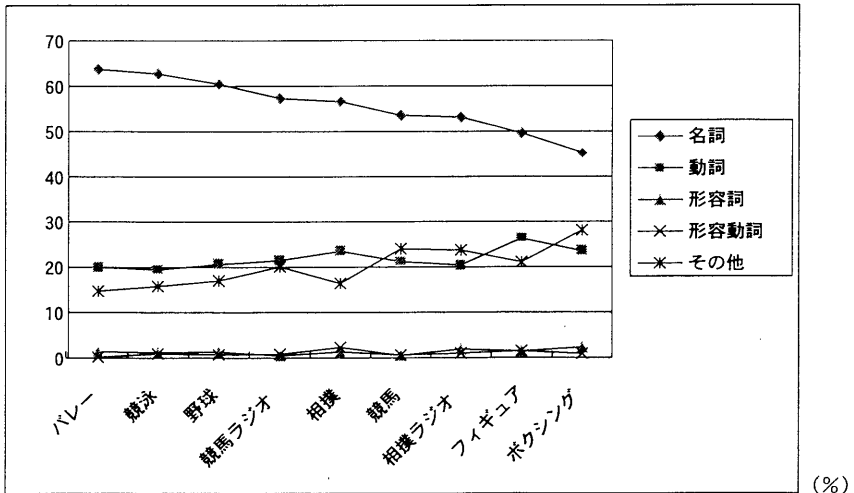


図2 スポーツ

大野（1956）によると、万葉集と源氏物語の名詞、動詞、形容詞、形容動詞、その他の百分率をグラフに目盛り、万葉集と源氏物語を両端として結んでいくと、図1のようになり次の事実が見出された。

- (1) 名詞の比率は、万葉集、随筆グループ、日記グループ、物語グループの順で減少する。
- (2) 形容動詞の比率は、万葉集、土佐日記、竹取物語、方丈記、徒然草においては低い比率を示すが、それは、奈良朝語及び漢文訓読系の言語において形容動詞が少ないことを反映し、枕草子、源氏物語、紫式部日記、讃岐典侍日記においては高い比率を示すが、それは平安朝の女流文学語においては形容動詞が多く用いられていることを示すものである。
- (3) 形容詞の比率は、名詞と反対に、万葉集、随筆グループ、日記グループ、物語グループの順で増大する。
- (4) 動詞の比率も、名詞と反対に、万葉集、随筆グループ、日記グループ、物語グループの順で増大する。
- (5) 「その他」にふくまれる語の比率は各作品において、作品の大小に関せず大体一定した比率を保っている。

これより、名詞は単調減少の線となり、他は単調増大の線となる。各作品における語彙の各品詞の増大、減少が、常にほぼ一定であることを述べた。

この大野の法則のグラフになぞらえ、実況中継の語彙構成比率のグラフを作成したものが図2である。一見すると、バレーボール、競泳、野球が万葉集に近く、競馬のラジオ中継、相撲、競馬、相撲のラジオ中継が随筆グループに、フィギュアスケートが日記グループに、ボクシングが物語グループに、それぞれ近い関係にあると考えられる。ただ、競馬、相撲のラジオ中継、ボクシングでは、動詞の割合に対しその他の割合が上回っているため、グラフの傾きが乱れていることがわかる。競馬は動詞が21.2%に対してその他が24.0%、相撲のラジオ中継は動詞が20.2%に対してその他が23.7%、ボクシングにおいては動詞が23.5%に対してその他が28.1%と5%以上も上回る結果が出ている。

5. 結論

大野が「現代の作品にもこのような現象が見出せるのではないかと推測していたように、スポーツの実況中継においてもグラフには品詞ごとに特徴のある偏りが見られた。このような結果に至った理由としては、以下のことが挙げられる。大野（1956）によれ

ば、万葉集は素材の変化に多様性を示すため、判断、叙述の仕方が単純で、描写に用いられる語彙が乏しいと言われるものだ。これに、展開が速く実況も固有名詞や専門用語の連発に偏りがちであったという点で、バレーボール、競泳、野球が対応した。一方の対角となる物語グループは、大野（1956）より、描写や叙述が繊細であり、名詞以外の語彙が増えることが特徴だ。これに、選手の動きを細かく捉えようとするボクシングの実況が対応し、フィギュアスケートはその芸術性を目で味わいながら伝えていくという部分で、女流日記文学作品に近い数値を示したと考えられる。そして、その万葉集的な実況と、物語、日記の実況の間となる実況が、相撲と競馬であった。

その中でも、ラジオという声でしか相手に情報が伝わらない媒体では、数値ではなく両者の表現方法に特徴が表れたと言える。三宅（2004）でも、テレビとラジオの比較について、「ラジオが競技進行を描写する時間の割合が多いこと」を示し、「ラジオでは視覚情報を補うため、アナウンサーが周りの状況の説明、動きの描写、沈黙を作らないおしゃべりなどの工夫を行うこと」も挙げている。実況中継においては、競馬のラジオ中継はテレビの実況中継と同様に、臨場感を与えるような勢いのある実況であったのに対し、相撲のラジオ中継はより正確な情報を細かく伝えようとする実況であった。その為、相撲と相撲のラジオ中継に関しては1分当りの語彙数に差が開いたが、競馬と競馬のラジオ中継ではほぼ同じ語彙量となった。テレビとラジオによる実況において、このような違いが出たことは意外な結果であった。

また、実況中継の語彙構成においてはスポーツのジャンルというものは関係を持たないことがわかった。表から、競技時間も結果には影響を与えていないことが言える。資料対象とした競技時間が長い順は、バレーボール、競馬と競馬のラジオ中継、野球、相撲と相撲のラジオ中継、フィギュアスケート、競泳、ボクシングだが、1分当りの語彙量は多い順に競馬のラジオ中継、競馬、ボクシング、野球、相撲のラジオ中継、競泳、バレーボール、相撲、フィギュアスケートとなった。さらには、1分当りの語彙量と、品詞の中で最も多くの割合を占める名詞の構成比率も比例しなかった。1分当りの語彙量が多い順に競馬のラジオ中継、競馬、ボクシング、野球、相撲のラジオ中継、競泳、バレーボール、相撲、フィギュアスケートとなつたのに対し、名詞の割合が大きい順にはバレーボール、競泳、野球、競馬のラジオ中継、相撲、競馬、競馬のラジオ中継、フィギュアスケート、ボクシングであった。実況中継に特有であったその他の割合でも、多い順にボクシング、競馬、相撲のラジオ中継、フィギュアスケート、競馬のラジオ中継、野球、競泳、相撲、バレーボールの順となり、語彙量との関係は見出せなかった。実況中継において、語彙比率に影響を与えるのは競技の系統でなく、実況の系統である

と考える。

しかし、古典文学作品とスポーツの実況中継の語彙比率は客観的な数値データで分析をすると全くと言っていいほどかけ離れているということがわかる。これは、グラフからもその他の語の比率というものが大きく影響を与えていることを意味していると考えられる。実況中継には、解説者との対話が含まれるために応答の感動詞が多発する。それ故にその他の割合が増え、生きた日本語の象徴とも言える実況中継と文学作品との明確な差として表れるのである。

以上をグラフ化すると図3のようになる。

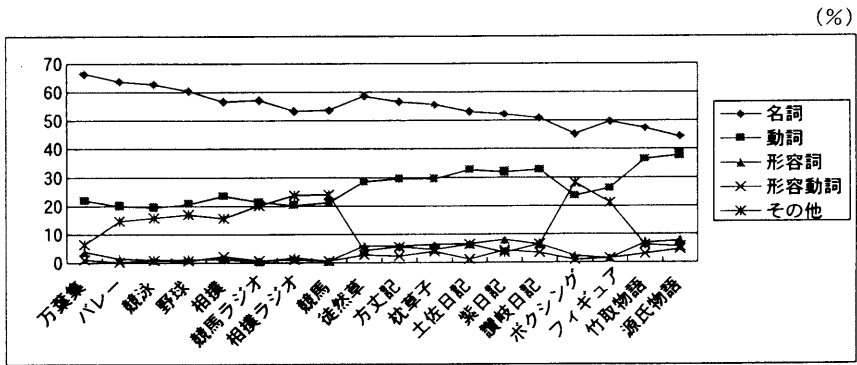


図3 古典文学作品とスポーツ実況中継

左から万葉集、バレーボール、競泳、相撲、競馬のラジオ中継、相撲のラジオ中継、競馬、徒然草、方丈記、枕草子、土佐日記、紫式部日記、讃岐典侍日記、ボクシング、フィギュアスケート、竹取物語、源氏物語の順に並んだ。その他のラインはかなり乱れているが、それを除けば、現代の特徴的な日本語の一つと言える実況中継が、このような形で古典文学作品に対応する現象を見せたと言える。

これからまた時間を経ていく中で、新たに様々なスポーツ中継がなされるようになり、実況中継というものも変化をしていくことだろう。例えば、本論で資料に用いたスポーツ中継はすべて男性アナウンサーによる実況であったが、女性アナウンサーによる実況が増えれば、また違った結果が得られるのではないだろうか。さらには、大野の法則で分析から除外されていた助詞、助動詞にはどういった傾向が見られるのか。あるいは分析方法として、形容動詞を認めない時枝文法を用い形容動詞を体言と辞で分類し、集計した場合はどのような語彙比率になるのだろうか。今後、まだ広がる可能性を含んだ研究であると考えられる。

参考文献

- 大野晋 1956「基本語彙に関する二三の研究」『国語学』24
- 阪倉篤義 1974『改稿 日本文法の話 第3版』教育出版
- 風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健 1993『言語学』
- 齋藤孝滋 1999『地域言語調査研究法』おうふう
- 金田一京助・佐伯梅友・大石初太郎・野村雅昭編 1994『新選国語辞典 第7版』小学館
- 新村出 1999『広辞苑 第五版』岩波書店
- 宮崎幹朗 1990「テレビの中のスポーツ」『スポーツの社会学』世界思想社
- 亀山佳明 1990「スタジアムの詩学」『スポーツの社会学』世界思想社
- 三宅和子 2004「スポーツ実況放送のフレーム」『メディアとことば1』ひつじ書房

(2005年 卒業)